

人の子供は人全体として存在し数えられる。家族は共同社会の現実を成している。プルンナーは家族生活において、「我」とは絶対的区分のある「他者」との連関を学び、「我」とは異った他者を他者として承認することを学び、そのことによって子供は一人の人格として形成されてゆくといっている。子供は家族の感化を受けた後、生長すべき地域の感化を受け、地域社会の教育は幼稚園、更に学校を通してなされる。地域社会は家族の結合体としてあり、それが幼稚園、学校の教育の運営の基礎となる。

結語、児童中心主義とアガベ

以上において、キリスト教主義幼児教育の本質は、幼児が一個の人格として存在し、その人格性が社会の中にあつて、「他者」との關係を通して主体的に形成され、自覚的存在に到るように導くことであつた。幼児は模倣的存在の時代ではあるが、自ら模倣しようとする力が内部にあり、それが自覚的存在へと発展するので、幼児の自己形成、即ち自由が尊重されなければならない。幼児教育は児童中心的でなければならない。そして幼児は人格として存在するゆえに保育の根本動機は幼児に対する超価値的なアガベの教育愛にあるのであつて、教師は幼児に愛をもって自己同一をなし、自ら幼児にすることによって、保育の任務を達成しなければならぬ。

Bertrand Russell の幼児教育論とその現代的意義

大阪基督教短期大学

西本美節

1、Bertrand Russell は、一八七二年英国の貴族の子として生る。現在もなお、平和運動に活躍している。彼は、今から三十年前即ち、一九二六年に「教育論——特に幼児期における」(On Education, especially in Early Childhood)を出版している。本書はそれ以来一九五一年に亘り、十一版を重ねている。これ等の点を考え合せても、彼の教育論は現代に至つても、そのまま価値あると思われる故に、ここに紹介する。彼は「この他多くの著書を出し、本書出版後も著作している。しかし今回は、「特に幼児期に於ける」と示されている本書にのみ止めておきたいと思う。彼は元來哲学者であり、教育学者ではない。その点、この書全体を通じ考えさせられる所も多少はあるが、彼の言おうとしている平和主義、自由主義、科学主義、合理主義又、幼児期の教育理想についての根本は、高く評価されてよいと思う。

彼は、彼自身や、彼の二児の育児経験を基に、種々の問題について註釈と訓誡とを与えている。この書に「特に幼児期に於ける」と云う副題をつけている事は、重要な意味を持ち、主に両親の為の書物として書いている。

人間の性格は幼年期即ち、六歳以前に決定されるものである。教育によってその理想がなされる時、一応知識と性格の教育を切り離し、心理学を重視し、科学的に考えねばならない事を幼児期の教育に於いて、忘れてはならない目的の一つとしている。そこで彼は両親の持つ教育的意義を強調している。彼は始めに一般的な近代教育理論の様々な要求について検討し、次いで教育の目的を示している。教育理論の要求及び目的から流れ出る幼児期教育の重要性、特に性格形成、道徳教育について検討し、幼年期以後に於ける様々な知育について述べている。しかしここでは紙面の都合上、性格、道

徳教育についてのみに止め、現代的価値を検討しようと思う。

二、生後第一年即ち嬰兒期を始めに取り上げている。これは従来は教育の圏外にあったものなのである。彼はこの時すでに習慣形成の根ざしている事を力説している。嬰兒の規則的生活の経験を習慣づける事は後に本能と同じ様に感ずる程の、深い根本的支配力を持つものである。科学的な適当な保護や技術が必要で、自発的活動を奨励し、訓育を少くして訓練の必要を認めている。精神の安定を生み出し、嬰兒自身の速度で自ら学ばせる機会を与えるのであると述べている。この時期は他の時期より習慣形成を身につける事が容易な時期であり、これが、性格及び道徳教育の上に、よい時期である事を示している。

次に一才から六才までの教育について、性格形成は六才で完了しなければならぬし、道徳教育も完全に近いまでにならなければいけないとしている。これ等の教育を成功させるために、彼は、恐怖、遊びと空想、建設的である事、自分本位と所有権、真実さ、罰、他の子供達の持つ重要性、愛情と同情、性教育、ナースリ・スクールと十項目に分け、夫々その特徴と実例、訓育を述べているが、今それを細かく説明する暇を持たないので、総括的に述べて行きたいと思う。

独立性が出来、自由を得て、好奇心を發揮し始めると共に恐怖は生れるものである。不合理な恐怖は科学的理解に基づき説明によって克服する喜びを味わせる事がよい。禁止や、抑圧はさげ、恐怖心を取り除き、広い物の見方や、あらゆる面での生き生きとした興味を与える様にすれば自由になり、恐怖は克服され、道徳教育も自分をコントロールする力をつける事によって習慣ずけて行く事が出来る。子供のあらゆる質問には、当り前の事柄として説明するのがよ

いと述べ、特に性教育の場合もこの事を強調している。子供は将来の活動の為の稽古として、成人の眞似事をして遊び、又遊ぶ事が好きなものである。子供の本能的欲望である成人になりたい願望即ち、力への憧れを持ち、自分の劣等感を遊びによるあらゆる形で克服している。彼は遊びの教育的価値を、新しい能力を獲得し、子供にとって大切な想像性を培う意味に於いて賞讃し、認めている。子供の力への考えの正しい脱皮のために、遊びを認める事は、科学的発見や、芸術的創作を生み出す有益な性格を学ぶ事が出来る事を述べ、この機会を与えると共に児童心理の研究の大切な事を示している。彼の平和主義に対し、想像の浄化を禁止し力を認めている事は、幼児期の特質を考えた時に、矛盾しているものではないのである。勇気を持って科学的実験に乗り出すこうした性格は、社会道徳とよく調和するものである事を示している。力への意志の満足のために、建設及び、破壊がある。子供は遊びの中で容易である破壊を始めに行い、後に技能と忍耐、耐久力による喜びを以って建設へと進むものである。子供の衝動は禁止せず、科学的教育によって、成長に対する興味を發達させ、生命の価値を感じさせて、道徳的訓育をする事がよい。子供のこうした段階の野心を充分刺激し、満足させ、子供自身に建設への努力を一任すべきで、心理的建設性にも関係し、その必要性を述べている。眞実であるという習慣は道徳教育の一つの目的である。嘘をつかせない様、眞実を身につけさせる為には、恐怖を起させる様な罰を加えず、嘘をつかぬ方がよい事を合理的に説明し、脅かしを使わず、成人は眞実を以って事に臨む事が絶対必要である事を示し、抑圧のない多くの質問にも眞実に、子供の理解し得る事より、少し余計に語り、好奇心と知的野心を刺激するのがよい。結局一貫した眞実さが、思想の上にも、言葉の上にも

よい習慣づけが出来るのである。更に彼は四才以下の幼児の嘘とは科学的、心理的態度で区別し認めている。彼は罰について、体罰を否定している。理性や訓戒で直らぬ時は、干渉するより、子供自身、時には禁止の必要な事を体験させ、又、心にもない事をつまらなさを知らせ、実行に際しては、熟練が必要となる。賞讃と叱責を用いての教育を認めるが、このいずれも比較する事は、軽蔑や、憎しみを生み出すのでよくないと言う事を述べている。子供は本能的な望ましくない自分本位と、所有権を持っている。教育的な目的は、外部的圧力を以って、子供の精神の中へ、習慣とか觀念とか、同情の形をとらせる。殴打や処罰は与えない事である。結局私有物と共有物の使い分けを導く事が大切な事である。公正は思想と習慣の中に注ぎ込むべき概念であるが、これは道德的訓育によつては理解出来ない事柄で、子供同志の交りによつてのみ正確に又、た易く理解出来るのである。この時成人は或制度を設けてやりさえすれば、この公正の衝動は早く克服される。成人の公平な愛情の分配も必要なのである。これまでは教師と両親がなし得る事柄を考察しているが、他の子供達の援助がなければ出来ない事柄について次に考察して行く。他の子供の必要は年令と共に増大して行く。他の子供とは、年長、年少、同年令である。子供の持つ模倣性により、年長、年少は、従属とか協力を学び、同年令は公正や平等な協力で自発性に活動の自由が与えられ、好ましい社会習慣を学ぶのである。ここでも取扱い上、天才に対する特異性の例外を認めている。愛情も同情も、子供の適切な取扱いから生れる自然の成果であると述べ、愛は引き出すもので、命令や目的、義務ではない。不当な愛は、オーバープロテクション的なを生む。彼はエディプス・コンプレックスは単なる理想化の夢であるとして認めていない。愛情と

同情は無理に感じさせるものでなく、感情の起る事実を納得させ、社会悪の真実を教え、親切心の習慣をしっかりと建てておかねばならぬ事を強調している。信賴に満ちた愛情深い性質こそ、正しい性格教育の一つであると述べている。性教育については二年頃に出る自慰は放っておけば自然に止んでしまう。好奇心も男女の生理的相違のみの形で表われ、要求の満足によつて消えてしまうものである。性教育はすべての子供に対し、十才以前に、科学的に話し、父親の生殖に於ける役割も、両親や、教師から教えるのがよい。刺激的な思春期は避けるのがよい。よからぬ友達から教えられる歪められた知識や、脅かしによる恐怖、又神經質、妄想等は好ましくない事柄を生み出すものである事を示し、医学的に科学的に教え、母親となる期待と知識を正しく学ぶ事の重要性を述べている。最後に彼は、訓育は、ナースリ・スクールか、両親か、いずれにあるのか、という事を取り上げている。結局教育する場合、進歩に必要なのは、新しい技術を持った科学的愛によるものである時、ナースリ・スクールの方がよいとし、両親の好ましい献身的な求めるもののない幸福な愛も必要であり、両者の立場を異にした必要性を述べている。

三、現代的価値について考察すると、彼は科学的なものの方、心理学の重要性を認め、そこから流れ出る比較的正確な理想を画いている。特に、彼自身の経験を反省し、普通一般のための教育を強調している。自分の理想を彼の二児に実際に適用し、観察によつてより正確なものへと進めている。人類を平和に幸福にするために、彼は始めの教育である幼児期の特異性を考慮しなければならぬ事を強調している。人間が人間的な身体及び、能力が大体成人に近づき、特に性格が一応形成する時期が幼児期であるとすれば、彼を最も価値づけるものは、この時期の重大さを、見出ししている事なので

ある。彼は幼児期の心理をよくとらえ、幼児期にふさわしい訓育をなし、この幼児期に、充分その特徴を發揮させる事が、次への段階への土台となり基礎となる事を強調している。そこで、彼は習慣づけをしたり、又子供自身から学び取らせようと自発活動を重んじ、物事を理解する様に、導びいている。特にこの時期に性教育を取り入れた事は注目すべき事である。子供を教育するに當って正しい科学的な愛情を要求し、成人はいかなる場合も又、子供のいかなる質問についても、極当り前に、公正に、正確に、真実を以て行かなければならないと述べている。彼は理性的な成人のする教育は、理性的な子供を作ると云い、真実さも、愛情も、恐怖もその他あらゆる面に於いても、成人を見習う故に、教師、特に両親の教育の必要性を説いている。彼は子供達のこれ等の教育は、遊びを通して行われるのであり、子供の遊びが大切である事を認めている。この様に、彼は、現在幼児教育の目的となっている子供の自発性、創造性、科学的態度、望ましい社会性、生活及び思考に於ける道德的習慣づけを、児童心理学的な科学的態度で示している事を彼の幼児教育論が三十年前に、すでに示されていた事は、今日の幼児教育に於ける偉大な価値を認める事が出来る。その上彼は、一般的な訓育を主に示しながら、夫々例外のある事を認めている。それは彼の幼児教育論の中の広さ、高い価値をもたらししているもので、現代常に云われている個人差を認めるといふ事に通ずるからである。その上、幼児教育に當って両親教育の重要性を述べている事も、現代の要求を一致している事柄である。只単に彼は理想的理論にのみ止まらず、彼自身が実践している事は、実際のな意味を深め、この教育理論の健全さを物語っている。

彼は幼児教育即ち、性格形成、道德教育に止めず、更に進んで幼

児期以後、大学に至るまで、又好ましい社会人となる為、知育の部を設け、彼の教育の理想化を具体化している。この点も大いに認めるべき事柄であらう。

Bertrand Russell : On Education—Especially in Early
Childhood, George Allen & Unwin Ltd, London, 1926,
1951 (11 th Edition)

保育園児の家庭の実態調査

名古屋市立保育短期大学

甲斐久生・成田鏡一

市川八重・伊藤三保子

古内桂子

元来、保育所というところは、言うまでもなく、保育に欠ける幼児をその家庭に代って保護育成する場である。そこで現在果して保育所がその保育所たる本来の使命をどの程度まで果し、児童福祉施設としての任務をどれ程全うしているかということを終戦後の保育所の数的発達とそこに收容された幼児数との比率、又現在入所している園児の家庭環境などから客観的な現在の保育所の実態を把握することを目的に、手近かな名古屋市内の保育所を昨年十二月現在の資料を基にして調査を進めた。

一、数から見た保育所と幼児

第I表は、市役所にある保育所認可施設名簿というのを基にして二十三年以後の保育所の増加状況を、グラフにしたものである。